婦人と新社會

山田わか主筆

參月號

毎月一回一日發行　第拾參號　大正十年三月一日發行



春の此の日和を

――三越へ、必要品揃ひの三越へ

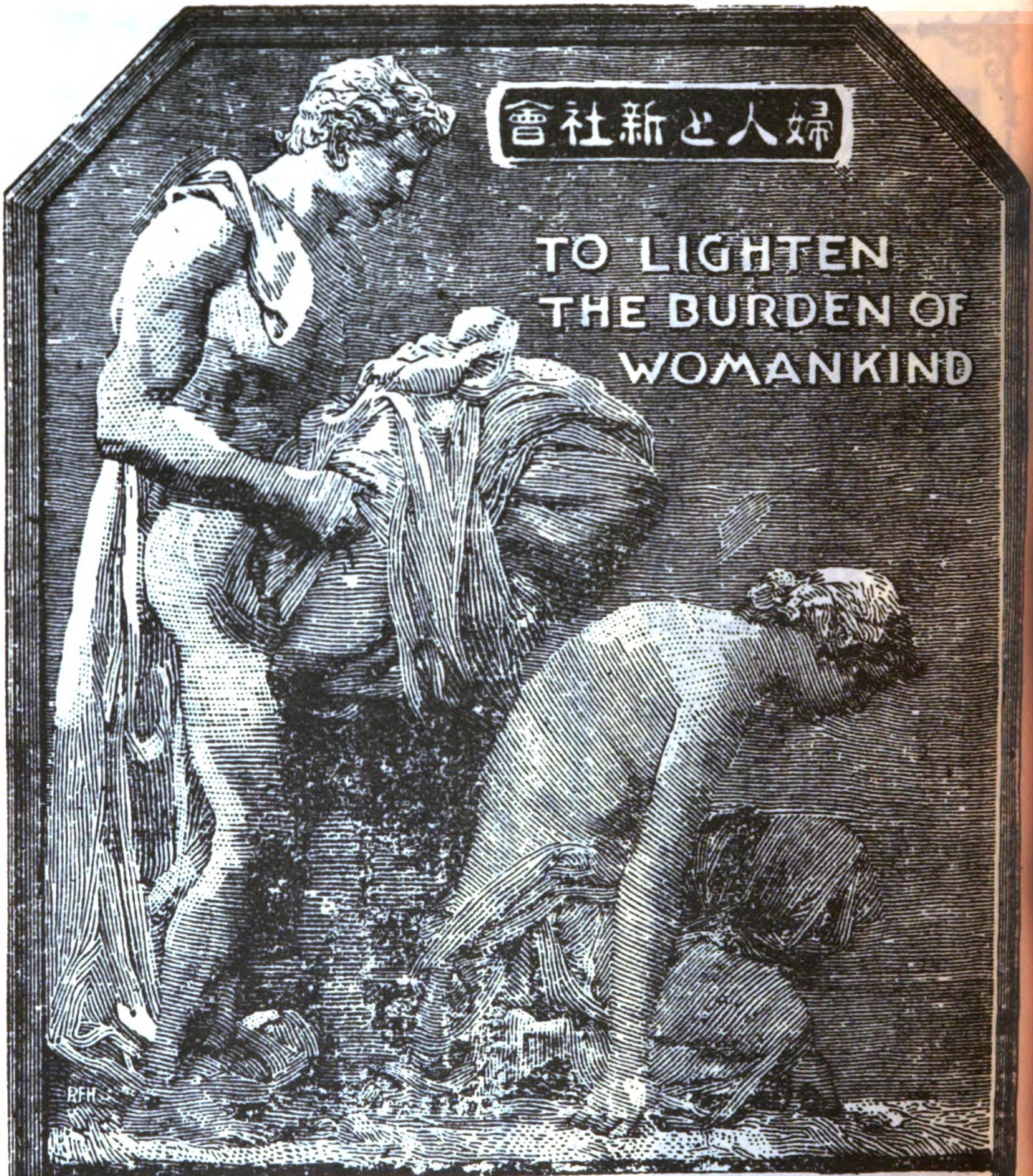
三越の店は常に清新の氣に滿て居ります、殊に流行の新品や、その他澤山取揃て御座います。

・東洋品陳列 支那を中心としたる、東洋の雑貨を集め三月五日より

・春季新柄陳列 三越獨特の流行の新柄呉服類を三月二十日より陳列

・三越の三月の定休日・三月十日・三月廿五日・

東京 (越) 三越呉服店



女の負擔を輕くする男

參月號

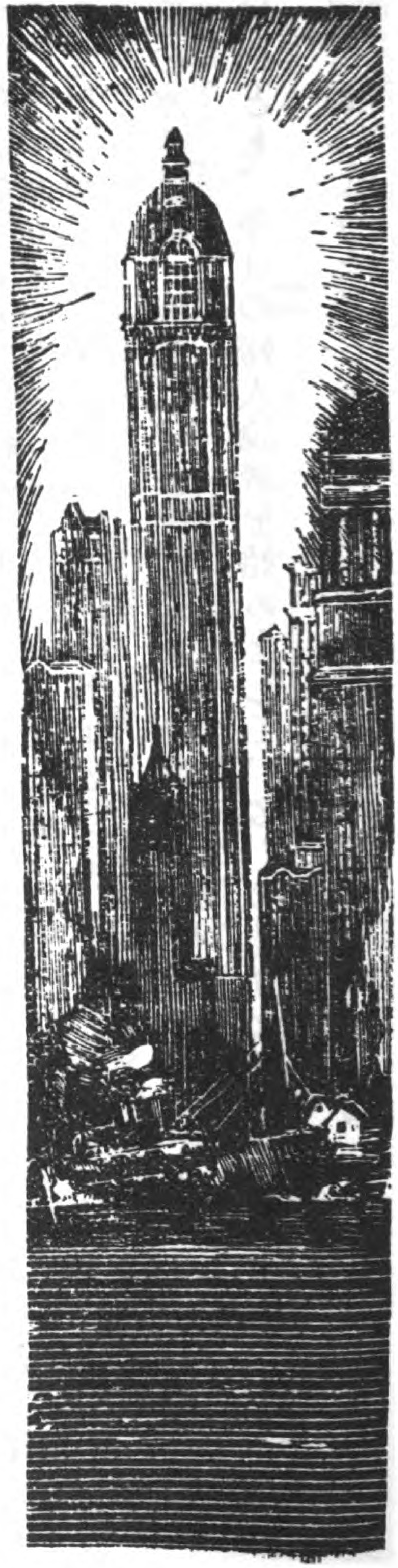
所謂民衆は國民性を常に最善に表現しては居なかつた。猶又、國民の過半數に依つても國民性は表現されて居なかつた。

如何なる社會にも自然の精華(エリテ)である人物がある。その精華が誰れよりも最善に全國民の魂例へば、急激な思想にしろ、又は、その最も根本的な傾向にしろを最も能く表現し得る。

けれども、政治家はこの事實を餘りたび〴〵忘れて居る。言ひ換へれば政治家は民衆に要求されてから始めて事をするが、この間の消息を忘れて居るからである。

進歩的國民生活の維持には指導者、則ち、前述の精華が必要である。政治家はその精華に聞いて率先して事を爲さねばならぬのを忘れて、常に民衆から要求されて始めてことを爲さうとする。

(メクデューガルの Group-Mind から)



再び家庭の危機に附て

一

舊道德の力、及び、宗敎の力の失墜が今日の人心の動搖を來したと云ふことは夙に識者の認むる處であります。錨の用意もなく、梶も奪はれて碇泊所から突き出された船のような狀態に現代人は居るのであります。

一體、人には生殖の本能、親たるの本能、家庭を持ちたいと云ふ本能があつて、これ等の本能から來る動機が、あらゆる他の動機をひつくるめたものよりも強く人を活

動させて居るものであります。

處が、今日の混沌たる狀態に血迷つた人々は人間の生命其のものと同じように大切なそれ等の本能を輕視し、枝葉な事柄として取扱はうとしてゐます。

併し、机上の議論は何であらうとも、事實は人間の親たるの本能、家庭的の本能が文明の發達の基礎となつて居ます。戰爭が人道化されたり、貧民救濟の聲が高くなつたり、少年及び婦人勞働の保護法が出來たり、動物愛護の精神が生れたりしたのは、此の親たるの本能が基礎になつて居るのであります。家庭、母、子供を中心として生れた優しい情緒が社會正義の觀念の發達になつてゐるのであります。

白痴狂癲か、さもなければ、人間の慾を所有しない聖人かでない限り、人は皆家庭の安定を冀つてゐます。親たる本能の滿足を慾望してゐます。そして、家庭の安定、家庭の永久性が、直ちに、社會の安定、社會の永久性であります。

けれども、今日の婦人論者を始めとして、多くの社會改革家は此の重大なる家庭の問題に觸れようと致しません。家庭が、今、非常なる危機に面して居ることに大方の

議者は無關心で居るのであります。

二

家庭を不安定にし、從つて社會を動搖させる要素は非常に複雜であつて、一ツの要素を播べたゞけでは今日の此の狀態を說明することは出來ませんが、其の重もなるものを擧げて見るなら、第一には機械產業の勃興、第二には個人主義の發達であります。

下層階級に於ける家庭破壞の原因は經濟にあります。婦人が工場に吸收されて行くために家庭は家庭のかたちをなさなくなつたのであります。

賃銀生活者に對する最も重大なることは其の位置の不安定と云ふことであります。產業は勞働者の利益よりも、亦、消費者の利益よりも資本に對する純益と云ふことが主になつて居ます。ですから、機械產業の發達の結果は失業問題がどんな僻村へも這入つて行きます。工場のごうくと立てる唸り聲が周圍の小規模の仕事場を呑んでしまひました。そして、此の狀態が職工の勤勉と眞面目の習慣を失はせ、社會的の無能

者、無責任者を造り、家庭の廢頽となり、結局は家庭の遺棄、貧窮、浮浪、罪悪の增化となるのであります。

又、新しい産業組織は中流階級の婦人に影響を與へました。中流階級の婦人が經濟的の仕事に從事し、經濟的獨立をするやうになつたことが、家庭に少なからざる影響を與へました。これは個人の權利、個人の尊貴と云ふ觀念の發達となり、經濟上の依頼、家庭内の雜務に對する反逆によつて、一層問題を複雜にしました。

婦人に經濟上の獨立の機會と家庭の雜務から逃れ出る道を造つたことが母として、家庭の建設者としての無資格者を增加したのであります。

又、過ぐる何年かの間の富の增大は有産階級の妻達をより寄生虫的となし、誘惑の增大となり、利己主義的な無責任な個人主義の傾向を著しくなし、家庭の意義の忘却となりました。それ等の狀態が、又、性的道德の廢頽（はいたい）となり、結婚關係の精神的意義を無視することによつて事態は益々混雜して來ました。

結婚關係に對する宗教的の意義を無視し、克己的道德を排し、又は、過去の家庭を

保存するために大きな役目を果してゐた制度と云ふものが全つく無視されるようになつて以來、兩親並びに社會は次の時代に家庭の道德的、及び、社會的意義を敎へることを全く等閑に附すやうになりました。社會的禍が殖へたことや、又は、家庭の安定が恐しくぐらついてゐることは此處にも大きな原因があります。

三

產業組織の變化と同じように家庭に影響を與へたものは民主々義の精神であります。始めは政治の完成と云ふ方面にのみ動いてゐた民主々義の精神はツイに社會全般に行きわたるようになりました。前世紀の中葉に於て、奴隸制度が崩潰して以來、民主々義の社會化は一足とびに進められたのでありました。財閥的の個人主義と民主々義との大きな爭ひが此の民主々義を世界的に到しました。其の爭ひは、民主々義の精神を烈しくする計りでありました。そして最後に此の民主々義の精神が婦人に迄浸潤して行きました。何と云つても婦人は家庭に付ひての保守的な習慣をもつて居たゝめに其の精神の影響を受けるのが最後であつたのです。

習慣を守ると云ふことは家庭の並びに國家の生命ではありません。併し、限られた狹い範圍に蟄居してゐての家族の親密共働と云ふことは文明生活の發達に逆ふものであります。忠實の精神、自己犠牲、道徳上の責任を守ることの誇りが家庭内にのみ限られてあることは今日の文明生活の理想に伴つたものではありません。

此の家庭的精神と、民主々義の精神とが今は或る範圍迄、相反するものとなつて居ります。家庭は永い間、外部的な法律や、又は、獨斷的な宗敎の批准を受けて來たのでありますが、民主々義的良心の勃興によつて、今は苦しんでゐます。家庭は進歩的な自己の良心による民主々義の精神が要求する役目を果そうとする時に、稍困難を感じるようになつたのであります。

其處で新時代の要求は、家庭は最早、其の安定と永久性を外部の力によるのではなく、眞實な、聰明な、生きた自由意志によつて造られなければならなくなりました。

ダーウインの『種の起元』が出版されて以來、神學、及び倫理學に於ける權柄主義は其の石頭を打ちくだかれて、そして、民主々義の精神が非常に力強くなつたのであ

りました。進化論はせん〳〵と靜的な、外部的な、道德の制度化を無効にしました。人間は、だん〳〵と、結婚はたとへ、神聖なものであつても、併し、進歩的な共同生活に於て個性の發展に資するものが價値の終局の尺度であると感じるようになりました。

四

亞米利加に於ける離婚の數の增化に付いて、ハワード敎授は云つてゐます。『社會進化を眞面目に研究する人の目には、離婚の數の急速の增加は精神的解放の偉大なる過程に於ける出來事であつて、これが男と女の關係的位置を根本的に變化するものである。個人主義が社會化されたことによつて家長的家族制度は破壞されてしまつた。妻及び、子供は夫又は父の權力からだん〳〵解放されて行つて、そして直接に社會制裁を受けるようになる。その結果、家族の一致共同の代りに新しい國家の一致共同が必要になる。家族的の結束はもはや强制することはできないが、併し、奬勵するだけである。家族をして一致共同させることはもはや法律によつてゞはなく、併し、精神に

よつてでなければならない……家庭は根本的に精神的になつたのである。實際、個人主義の社會化は結婚により高尙な理想を齎らし、兩性關係により正しい見解を與へた。』と

結婚に對する權限が外部からのものでなく社會良心の發達によつて定まるようになつたことは結婚其のものにより重い責任が生じました。則ち、結婚關係の確實、又は永續と言ふことは、最早、習慣、又は法律と云ふものによるのではなくなつたのです。そして、結婚關係に道德上の又は精神上の價値があるとすれば、則ち、結婚が、單なる形式、或ひは社會制度でないとすれば、其結婚の生命は意志と意志の同情的、及び聰明な共同によるわけになります。それ故、家庭は今日に於ては、單なる惰性的な習慣によつては保たれなくなりました、新しい家庭的精神が生れなければならない時に今、私達は致達してゐるのであります。

一言で云へば、今迄、個人と個人を結びつけて一ッの家庭を造られせてゐた紲は新時代の男女を結び付けるにはもう役に立たなくなつたのであります。其の紲が古くな

つたからと云つて切りつぱなしにして置いて差し支へないと云ふのが今日の婦人論者並びに、社會改良家でありますが、併し、それは重大なる非慘事であります。何は置いても、新しい紐を創造しなければならないのであります。家族制度の崩潰を云々し、家庭生活を輕視しようとするのが、今日の流行でありますけれども、子を見るのは親に勝るものはなく、老衰者の看護は子に勝るものがない以上、家族制度は大切であります。

「これが愛である」と人は決して云ふことは出來ない。なぜなら、愛は人が遠い處から豫想するだけに止まる天國である。其處迄、まだ、誰も行つたものはない……それは唯無限な感情である……私は私の夫を信じてゐる……もし、私が私の手に罪惡を犯す恐しい武器を持つてゐたとしても、私の夫は彼の肩も動かさずに平氣で其れを見るだらう。私の胸から湧き出て來る優しさは無盡藏であることを知つてゐる彼は武器を手にした私を見ても『よろしい』と云つて、そして、私の傍へよつて來て私のしようとしてゐることの正しい理由を見ようとするだらう。(『女』より)



集合的育兒法と子供の幸福

過去二三十年の間に、凡ての進歩的な歐米各國に於ては嬰兒保護に關する現代的の政策が計畫されつゝありました。此の運動は佛蘭西から始まつたものであります。そして、これは『乳の質』と、『母の相談所』と云ふ二點から出立したものであります。『乳の質』と云ふのは牛乳で育てられる嬰兒に純粹な牛乳を供給しようとするのが目的で、そして、『母の相談所』と云ふのは母を敎育し母乳を嬰兒に與へることを奬勵するのであります。此の二ッは始めは別々に始められたものでありますが、今は、一ッになつて居ります。

獨逸、白耳義、英國、米國に於て人の注意をひゝたものは牛乳配達所でありました。

そして、これは衞生局の管理の下に置かれ、母乳の補助となされねばならぬと云ふこと、又、經驗に富んだ婦人の監督と奉仕が必要であると云ふことが忽ち發見されました。且つ又、嬰兒の死亡率を減ずる方法は母乳を奬勵することであり、其の上に、嬰兒の病氣を豫防することであると云ふことが發見されました。

其處で、母を敎育するためには母のための講演會、又は、解り易く書いた印刷物であると云ふことになりましたが、併し、それよりも、醫者、助産婦、及び、訪問看護婦の直接の忠告がより有効であると云ふごとになり、『母の相談所』が先づ母の敎育に最も効力ある中心點となつたのであります。

『母の相談所』は單純に組織されました。一ッ或ひは二ッの部屋と一ッのテーブルと衡器(はかり)と、それから醫者でありました。最も大切なものは醫者で、そして、小兒科專門家でなければならず、又、其の仕事を好んでする人でなければなりませんでした。其の上に、其の醫者と共同して働く熟練のある訪問看護婦が必要でありました。

此の『母の相談所』は病兒を扱ふよりも、無病の子供を扱つて病氣を豫防するのが目

的でありますから、子供は生れた日から醫者の監督の下に置かれねばなりません。ですから、生れた日にすぐ『母の相談所』の本部へ屆け出をする必要があります。市の衛生局も亦此の仕事に共働しなければなりません。

多くの母達に此の『相談所』を利用させるために、彼女等を引きつけるもの、又は、強制が必要でありました。で、此の『相談所』へ度々出這入りをして、そして、醫者の命令をよく守つた母へは或る慈善團體から、又は、地方自治體から賞を與へるなど云ふことが工夫されました。子供が弱い場合には、殊に、此の『相談所』を利用するように當事者の方から母達に催促をするのでありました。どんな子供でも見逃さないように注意するのでありました。

牛乳配達所の方は莫大な費用がかゝりました。そして、費用の割りには『母の相談所』と比較して効果が少ないと云ふことでありました。で、牛乳配達所は衛生局の監督の下に『母の相談所』の一部にするがよらしい、そうしないと母乳が無駄になるから、そして、牛乳は醫者の監督の下に供給されなければならないと云ふことになりました。

當事者は、又、弱い子供に計りでなく、貧乏人の子供にも最上の牛乳が供給されるように努力しました。

最上な効果を擧げるために弱い子供、殊に、預けられてある子供、及び、私生兒が公の保護の下に置かれ、『相談所』が監督しなければならぬと云ふことになり、そして此の監督が唯機械的になるのを防ぐために經驗ある訪問看護婦の助力が必要になりました。

屋外勞働に從事しなければならない母から嬰兒を全然引き離してしまはない方法として晝間托兒所の有益さも認められてゐます。が、此處にも、矢張り、醫者の嚴密な監督が必要とされてゐます。

子供が他の家族に預けられてゐる場合には醫者の命令の下に完全なる責任をもつて訪問看護婦が子供を訪問するのであります。

嬰兒保護の凡ての機關、或ひは、個人として、嬰兒保護のために働いてゐる人は『母の相談所』本部の統一の下に共力するのが最も有効とされてゐます。各機關、各人が

皆嬰兒の利益と云ふ一點に其の目的を置くのですから。

亞米利加では、病兒のある家庭を監督し、病兒の生命を救ふために、司法上醫學上及び救濟行政の中央機關を設立し、そして、兒童局を設けるのが都市の重要な問題だとされてゐました。けれども、母、又は母の代りになる人を子供から離そうとする方法は、どんなに完全に思へる方法でも決して有効でないと云ふことが認められて居ます。

又、今日の渾沌たる社會狀態に於ては、どんなに澤山の慈善會があつても、嬰兒養育所があつても、併し、一定の中央機關があつて司法上、醫學上それ等の子供を監督しないことには何千と云ふ生きられる子供も死んでしまうし、又、疎略にされ、無學貪慾、淫奔になることから子供を保護することも出來ないと云ふことが認められてゐます。

ですから、獨逸の公選兒童保護者は兒童保護中央局のためには有効な仕事を爲し得るとされてゐます。こうした秩序ある仕事は、丁度、暴徒の無茶苦茶な攻擊を秩序正

しい正確な科學的な戰爭に代へると同じように、法律と醫學と救濟事業とを有効になし得るものだと信じられてゐます。そして、かような中央機關の統一原則は何處にあるかと云へば、それは學校でもなく、教會でもなく、父でもなく母でもなく、併し、最も古い、最も神聖な、最も必要な團體、則ち、家庭にあるのだとされてゐます。

これによつて見ても、托兒所と云ひ、其の他集合的育兒法は、結局子供は家庭に於て育てられなければならないと云ふ原則を實現し得る迄の一時の補助機關に過ぎないものであります。けれども、今日の兒童保護のための機關、及び、これに關聯する議論、又は、露國のソビエット政府の兒童のための施設など、皆、本末を顚倒してゐるものであることを私は遺憾とします。

私達の行く手に二ツの川岸が二人の男女のように相並んで行く。其の岸の二本の線は永遠に離れてゐる。けれども、中を流れる水によつて、又、永遠に相愛し相抱擁してゐる。

（『女』より）



不滿と社會主義

不完全な制度を完全に利用するには

一

産業の經營を民衆の手に移そうとする運動の動機は、先づ、大體に於て、さうするのが公共の利益であると云ふ處にあります。けれども、此の動機と共にもう一ッの大きな動機があります。そして、民衆が産業を經營しようとする要求がます〳〵大多數の後援を得て、そして、其の形式がます〳〵はつきりして來るに從つて其の第二の動機はます〳〵著明になつて來ました。

則ち、今日の經濟組織の不公平不平等が大いに攻擊されてゐます。經濟組織の不公

平不平等に對する此の不平は殆んど世界一般であります。不公平に對する此の叫びが一般に擴がつてゐる不滿足の表現であつて、そして、此の不滿が社會主義の眞髓になつて居るのであります。

民衆が不平滿々である時に當つて、其の民衆を動搖させようとすることは餘まりに容易なことであります。ですから、今日の煽動者の叫び、及び、民衆の動搖は民衆が現に持つてゐる不平よりも一層大きく一層烈しく現れてゐると云ふ觀があります。つまり、此の動搖に興味を持つて居る人が民衆の不平を可なり誇張させて居るのだと云ふことも、公平な目を持つた人には認められて居るのであります。

併し、いづれにしろ、今日の產業組織の運用に對して、殆んど慢性的な不滿の感情が存在してゐることは見逃がせない事實であります。そして、其の結果、共產主義的な叫びに民衆が耳を傾けるのは少しも怪しむに足りません。其處で、私共は此の民衆の不滿の經濟的基礎と云ふものを、今日の產業組織のために發見して置く必要があります。

もし、民衆の不滿の感情の原因が一時的の性質であるならば、今日民衆が動搖して居るからと云つて、今日の產業制度を根本的に變へる必要はありません。けれども、もし、それが今日の社會組織の本質の何處からか發生して來て居るものとするならば此の社會組織を根本的に變へる必要のあることは勿論であります。

二

社會主義の運動者は申ます。『今日の經濟組織は無駄が多く、其のために產業上の能率が擧がらない。』と。それに相違ないかも知れません。けれども、そう云つたからとて、それだけでは民衆の不滿を說明する役には立ちません。なぜなれば、不滿の原因は其處から計り出て來てゐるのではないのですから。又、彼等は申ます。『今日の社會制度は不公平である。何となれば、人によつて別な利益が與へられるから。』と。これは本當です。併し、これだけでは矢張り民衆の不滿を說明しません。乙よりも甲により多くの利益が行くと云ふ苦情は乙には財產がなく甲には財產があると云ふ處にあつて、つまり、私有財產が不當利益を與へると云ふ感情が流行して、そして、これが共產主義

的の政策に民衆を追ひ込むのでありますが、併し、其の感情には羨望と云ふものが混じてゐはしないかと云ふ懸念があります。それから、又、其の感情には他人から見下されたくないと云ふ氣持ちも喰付いてゐて、これが、又、前述の方向に民衆を走らせると云ふこともあります。

處で、これ等の感情は大部分迄主觀的なもので客觀的でないと云ふ處に私共は注意しなければなりません。成程、それ等の感情は一般的な、そして、客觀的な形式となつて表現されては居りますけれども、併し、先づ、普通にはそう云ふ感情は、自分自身が不利益を受けたり、見下されたりした人から始つてゐると見たら大した間違ひはないでせう。

勿論、富裕な人は貧乏な人程共産主義的な政策の必要を感じません。其處で、道德上の理由、乃至、社會の利益と云ふ理由から此の不滿が正當であるかどうかと云ふことが始終起つて來る執拗い問題であります。

三

現代の產業組織は自由競爭の下に私有財產制度を基礎にしたものであります。けれども、此の制度が無產階級の物質上の利益を害してゐたと一途に云つてしまうことは出來ません。無產階級が過去と現在とを比較して過去よりも現在が不利益であると云ふ理由から不滿を起す筈はありません。勿論、それは物質上の利益に關する範圍內に於てゞありますが。

私有財產を基礎とした產業競爭の組織が今日迄に富を平均し、產業能率を速かに進歩させたこと、或ひは少なくとも、私有財產と其の進歩とが共存してゐたことを人は抗むことは出來ないでせう。產業發達の結果、無產階級は其の手の屆く範圍內に於ては可なり生活上の愉快を增してゐることも事實です。そして、其の結果は財產を所有してゐる人々の運命よりも、比較的より大きな度に於て無產階級の人々の運命により多くの改良がありました。

競爭の制度は富者をます〳〵富まし、貧乏人をます〳〵貧乏にすると云ふことは寸鐵的な言葉であります。けれども、無產階級の今日の生活が今より十年、二十年、乃

至、五十年以前の生活よりもより苦しく、より退歩してゐると云ふのならば其れは本當です。けれども、もし、その反證があるならば其れは嘘だと云ふことになります。無產階級の生活の逼迫はゆるみ、愉快の度が殖へてゐるとすると、不滿の原因は何處か外に求めなければならぬと云ふことになります。

無產階級の生活の仕方によつて計つて見た時には、今日の制度が貧乏人をます〳〵貧乏にはしてゐないのであります。けれども、有產階級の生活と比較して見た時に、無產階級がます〳〵貧乏になつたように思へるのであります。ですから、有產階級に對して擧げられる反感の聲は、貧乏人自身の叫びと云ふよりも、むしろ、貧乏人以外の階級から擧げられてゐる場合ひが多いのであります。

貧乏人に賴まれたのでもなく、貧乏人の代辯をしてゐる人物を無視することは勿論出來ませんが、併し、今日の不安狀態はそう云ふ人物によつて誇張されてゐること、そして、社會の表面に現れてゐる反對の聲は、多く生活の苦痛を嘗めて居ない人々から來て居ることを私共は知つて居なければなりません。

又、必ずしも苦しまなくともよいのに苦しんでゐる人間が澤山あることも事實です。そう云ふ人は相當に愉快に生活出來るものを無駄なことに亂費する結果、自ら苦しんでゐるのであります。

四

普通に、人は名譽と云ふことを重んじますが、これは世間から自分が尊敬されたいと云ふ慾望です。これは誰でもが持つてゐる慾望です。此の名譽心は本當に善き名を得たいと云ふ貴いものではありますが、併し、今日に於ては、これが其の本當の意味に用ひられて居りません。名譽と云ふことが一種の人との張り合ひと云ふようなことになつて居ります。つまり、隣人よりも自分が世間からよりよく思はれたい、自分により多くの名譽を贏ち得たいと云ふ慾望になつて居ります。

其處で、現代の社會は競爭の著しい産業的經濟的社會でありますから、此の社會に於て、尊敬を受けたいとすれば、矢張り、産業的に經濟的に自分が隣人よりも勝らな

ければならぬと云ふことになります。

確實とか人格とか云ふことは今日の社會に於ても、勿論、何にかの役には立ちますが、併し、先づ、普通の場合ひに於ては、それだけでは社會から認められるには充分でなくなつてゐます。其處で、自分の威嚴を保ちたい、つまり、自尊心を維持して行かうとすれば、云ひかへれば世間から尊敬して貰はふとすれば、どうしても、經濟上それだけになつてゐなければならぬと云ふことになります。則ち、經濟上の成功者でなければならぬと云ふことになるのであります。そして、生れとか、有德とか云ふことは今日の社會から敬尊を買ふには餘りに微力であります。これに反してどんなに生れが下等でも人格が下劣でも經濟上の成功者は尊敬されると云ふようになつて居ります。人格や有德は人の目につくのが遲く、經濟上の力は忽ち遠い處迄にも響いて行くものですから、自然、人は經濟上の成功をのみ望むようになるのであります。

根本的に產業的である今日に於ては、人が世間から尊敬を受けようとすれば、どうしても、經濟的に成功してゐなければならないので、『あの人はいくらの身代があると

云つた時には必ずしもそれが其の人の人格を現したものではないにも拘らず、それが世間の信用を買ふのであります。ですから、經濟上の利益にならない人の能力は、今日の處では、尊敬を得る手段とならないのであります。こう云ふ習慣を持つた社會に生れ、育てられた人間にとつては殊更に經濟上の力が有力になるのであります。

併しながら、經濟上の競爭の發達に於て、第二の時代が來ます。つまり、經濟上の成功のみでは充分でないと云ふ時が來るのです。則ち、經濟上成功し得た能力を世間に現して自分の名譽を確實にしよう、つまり、自分の持つてゐる富計りでなく、富に併せて自分の能力も世間に認めて貰いたいと云ふ慾望です。これは普通、人の名譽心を滿足させる方法でありますから、從つて、自分の成功を大ひに見せびらかす必要が起つて來るのであります。自分と同等だと思つて居る人が爲すことを、矢張り、自分も絶對に爲す必要が起つて來るのみならず、それ等の人々よりもより以上なことを爲さなければ自分が目立たないと云ふことになつて來ます。

人間性のうちのこう云ふ要素が、生活の標準に多大な關係があります。そして、人間性と云ふものは非常な彈力性を持つてゐるものですから、從つて、生活の標準にも彈力性があります。例外な人間があると云ふこと、及び人間には用心と云ふことがあると云ふことを差し引ひても、猶、前述の名譽心と云ふものが收入以上の生活をさせるようになります。こう云ふ風にして、いくらでも收入が殖へれば殖へたゞけづゝ生活の標準を高くし擴げて行くものですから、いつになつても生活に餘裕は出來ないのであります。そして、一度、高くした生活の標準を再び引き下げようとすることは非常に困難になります。なぜなら、それが世間からの尊敬を抵下させることになりますから。

でありますから、衣服の價値の重もなる要素は身體を保護すると云ふことは、とうの昔に忘れられて、今は唯着る人の世間的の名譽の保護と云ふことになつて居ります。

ですから衣服は自分標準でなく、世間の目が標準になつて居ります。

或る若い婦人が『自分は人並み以上の服装をしてゐる、何處へ出てもひケを取らないだけの身なりをしてゐると云ふ氣持ちが宗敎の力から來る氣持ちや其の他あらゆるものゝ力から來る氣持ちよりも自分に安心立命を與へる。』と云つた言葉は此處の消息をよく言ひ現して居ります。恐らく、家屋に付いても亦食物に付いても同じことでありませう。

虛飾のために努力を無駄にすると云ふことは、勿論、新しいことではありません。又、見えの張り合ひと云ふことが現代にのみあるものではありません。現代の產業組織がそれ等を生んだものではありません。併しながら、自由競爭の組織が人間の其れ等の傾向を强くしました。

何と云つても、現代の經濟組織は以前と比較すると生活の手段を得る方法が容易になつて、滿足を得るの度も殖へてゐます。其の上に、個人の自由が伸張し、個人の活動範圍が廣くなりました。從つて、世間の尊敬を自分に引きつけるには經濟上の力を

ます〳〵利用しなければならなくなりました。此の傾向に對抗しようとする力も、勿論、あります。併し、其の力は餘りに微弱で、到底、其の一般の傾向をひつくり返へすことは出來ません。

全體から云ふならば、現代人の生活が樂になればなる程、見解も廣くなり他人との接觸も多くなり、他人と自分とを比較して見る機會も多くなります。從つて、名譽競爭の手段としての經濟上の力も大きなものが必要になつて來ます。同時に、又、經濟上の努力も大きくなつて來ます。其處で、これは唯單なる生活の安定を求むるものではないのですから、一般の社會改良策が今日の民心の不安を除去するとは思はれません。なぜなれば、不安の源は不平等にあるのではなく、密かに不平等を希望してゐる處にあるのですから。

六

人間の性質がこう云ふわけのものでありますから、人よりも自分がより多く所有しようとする努力はどうしても私有財産制度から離すことは出來ないのであります。同

時に、持つてゐない者が持つてゐる者を嫉むと云ふことになるのであります。

けれども、產業組織の基礎は私有財產制度であります。そして、これが今日の攻擊の標的になつてゐて、今日の人心の不安と不滿は皆此の制度から起つて來てゐるように云はれて居るのであります。併し、其の不安と不滿の原因は經濟的名譽心から來てゐるものであることは前に述べました。

其處で、先づ、そう云ふものが人間性であるとすれば、そう云ふ馬鹿氣た競爭からそして、其の競爭に喰付いてゐる不滿から民心を救ふことの困難は容易に推測出來ます。重ねてもう一度云ひますが、經濟上の競爭と云ふことは現代の著明な事實でありそして、これが現代社會の構造を貫いてゐるものでありますけれども、併し、これが現代產業生活の唯一の動機、乃至、最も重要なる現象ではないのであります。

ですから、社會主義が今日の人心の不安は私有財產制度に出立した競爭組織の必然な結果であると斷言するのは早まつた考へであると私は信ずるのであります。

私が此處で強く云つて置きたいことは現代の不安と不滿は經濟的名譽に其の原因が

あること、勿論、それが主なる原因でなくとも少なくとも有力な一つの原因であること、そして、此の不安は勿論今日の產業組織から離すことは出來ないこと、及び、今日の此の狀態の下に生れた一般の感情は必然私有財產制度に反對であること、從つて今日の自由競爭の產業組織に反對であること等であります。

七

社會主義者の主張を解釋すれば、其の私有財產があればこそ、人は名譽心にかられて不滿が起つて來る。だから、先づ私有財產を倒さなければならない、さうすることによつてあらゆる禍は一掃する。そして、名譽心から來る張り合ひと云ふものがもつと有益な方面に向つて働くようになると云ふことになります。けれども、私有財產があればこそ、其の張り合ひも出來、そして、今日の文明を造つたことも私共は忘れてはなりません。

ですから、私有財產を倒しても其の張り合ひだけが殘つて、そして、それが有益な方面に必ず使用されると云ふ保證があれば私有財產が倒されても差し支へがありませ

んが、併し、私有財産が倒れると共に其の張り合ひも消滅してしまいはしないでせうか？ それは丁度家が古くなつたからと云つて、全部燃してしまつて何にも材料を殘さないで、そして、新築の家を要求するのと同じことになりはしないかを恐れます。何となれば、今日の文明は私有財産の上に載つてゐるのであるから、其の私有財産を不意に倒すことは新規な材料で新規な文明を造らなければならないことになりますから。

ですから、私有財産を倒そうとすることは、これは昔の野蠻狀態、ルーズヴエルトの所謂野蠻社會主義に歸へることであります。で、此の野蠻社會主義的社會を理想の社會主義的社會にするには人間が突然利他主義の權化になるか、さもなければ再び私有財産制度を設定しなければ進步は見られなくなるでせう。

八

産業の民主々義を主張する人は政治上の民主々義を産業に應用しようとするものでありますが、併し、今日の立憲政治が成功したものとは決して云はれません。現存する共和國が決して政治上の黃金時代を現出してはゐないのであります。これに對して

論者は、それは經濟上の民主々義が行はれてゐないからだと申ます。つまり、政治上の民主々義と經濟上の民主々義とを合せて始めて完全になるのだと云ひますけれども併し、不完全なものを二つ集めた處が其れで完全になると云ふ道理はありません。政治上の民主々義が正しい方向に向つて居ると云つても、それだけで產業の民主々義を設定する理由とはなりません。

要するに機關が完全になると云ふことは何時の事か豫想はつかないのであります。ですから、今は機關をどうして完全にしようかと云ふことよりも、不完全な機關でも、これを完全に利用し得るように人間性を敎育する方が急務です。今日の人間は、まだ、政治上であれ經濟上であれ民主々義を應用する迄に進んでゐないことを忘れてはなりません。不完全な社會制度を完全に利用するように人間性を敎育することは、同時に、其の不完全な社會制度を完全なものに爲すことになるのであります。一般の人間は自分に本當に必要であるものを慾望しないで、必要でもないものを慾望するのです。此處に現代の不安の最大なる原因があることを私共は忘れてはならないのであります。



ミル著『婦人の服従』の梗概

男子と同じ機會を女子に許した時の可能的利益

1

もし、女子が解放されたならばどの位の利益が社會に增加するであらうか。

2

女子が男子に服從するために起る害惡は看過するには餘りに恐ろしい事である。法律上の權利が男子に計り與へられてある間は、悪は善と同樣に濫用されるであらう。

3

女子に凡ゆる職業の門戸を開くと云ふ事に關して、多數の人は其處から如何なる利益が生ずるかを聞かうとする。

4

女子を解放しての第一の大なる利益は男子が不當なる自己優越權を振ふ事を止めるであらう。女子を除外して置く事の

結果は男子の精神を腐らす事になる。殊にそれが無教育な下等な性質の男子に甚しい。勞せずして得たる榮譽は常に惡性な傲慢心を皷舞する。異性よりは一段高く置かれてある事、及び、その異性の一人の上に絶對權を有つてゐる事は、横柄を訓練する學校へ男子を入れて置くようなものである。

5

男子の横柄を訓練する學校は社會不正義の城堡である。眞の道徳と政治の原則は、唯、行爲のみを尊敬の資格としなければならない。生れではなく功績が權利に對する唯一の正當なる理由であらねばならない。處が、この原則とは正反對に、凡ての男兒が女兒を下位に置いて教育を受けてゐる。かう云ふ教育の方法が全廢されない間は弱者との同權の原則が男の感情を支配するようにはならない。

6

女子を解放しての第二の利益は、婦人が自由になれば社會奉仕に對する有效な心理的能力の量が二倍となる。社會は完全なる人員の缺乏を感じてゐる。その缺乏は凡ゆる職業を婦人に開放する事に依て幾分補ふ事ができるようになる。婦人の心的の力は、今は全々失はれては居らぬが、大部分は無駄にされてゐる。自由競爭は尙又男の智力を刺戟して、そして、彼等の有效なる力を增化する事になる。

7

婦人に平等の機會を與へる事は女子教育に改良を加へるこ事になる。而して彼女等の實力は男子の實力と歩調を合せて

發達する。其の時には婦人はあらゆる種類の事柄を了解するやうに敎へられる。倘又かくの如くに敎育された結果、婦人が持つてゐる人間としての意識は、自己の仕事を撰擇する權利を與へられて、その能力と道德的概念を擴くする。

8

女子が解放されての第三の利益は、しかる時に婦人の輿論は今よりは單に優勢である計りでなく、一層利益となるであらう。婦人は今日に於ても多くの勢力を有つてゐる。その勢力は、一方に於ては溫和、及び、優美を增し、又一方に於ては、勇氣を皷舞しつゝある。そのやさしい事と氣を引立てる勢力の結合から武士質氣が起る。その武士質氣は敵に對して、殊に婦人に對して、戰ひを好む性質に優しさを混へてゐる。女は自分等に好意を示したものに高い報酬を與へることによつて他の自個保護のできない階級とは違つてゐる。

9

女子が從屬の位置に止まらなければならぬとしてもその武士質氣の理想は倘保持すべきである。併し、それは不可能である。最早、弱者と雖も個人の武勇にたよつてはゐない、なぜなれば社會の主なる仕事は戰爭から產業に遷つてゐる。今は武勇及び優雅は正義及び愼重と云ふこと程に要求されてない。昔は正しい行爲が稱讚された。併し今日に於ては不善から踏み止まる力が稱讚に價するやうになつた。社會は弱者をして武俠的感情にたよらなくとも安全であるようになつてゐ

る。

10

過去に於ては婦人の勢力が惡い方に用ゐられることがたび〳〵であつた。で、其の理由は彼女等の家庭的勢力が一般的正義の原則に對する信仰よりは强くあつたからである。併し、現代の敎育と位置の下に置かれてゐる彼女達に對して、それを非難する事はできない。

もの丶有益と云ふことに付いて學ぶのを許されて居ない彼女達に對してどうして、それを奬勵できやうか。

11

婦人は近頃戰爭と博愛と云ふこととの二つの方面に勢力を用ゐてゐる。博愛主義に於ける彼女等の特別の範圍は宗敎を擴めるのと慈善事業である。けれども、此の兩者に於ても、彼女等の淺い經驗と制限された敎育の結果、效果ある報告を聞くことは出來なかつた。であるから、その影響は好ましいものでなかつたのである。

12

それ故、結論は、婦人が公德のために一層有益なる影響を及ぼす爲めに、より高き敎育を受け、人生の事實に突き當つて行く必要があると云ふ事になる。

13

誘惑の多い階級の婦人の家庭的勢力は男子をして相應の位置を保たしむるようになると云ふことが云はれる。けれども、それは不行狀なる男よりは弱い男にとつてより以上さう云ふ傾向があるのである。併し、男女同等なる法律の下には婦

人の其の勢力がより大なるものであるであらう。社會的位置が高くなつた時には妻の勢力が夫の位置の標準以下に下ることを食ひ止める場合もある。併し、又、妻のその勢力が其の標準以上に夫が登ろうとする妨げとなる場合もある。智識の低級な妻は、社會が彼女の夫に要求する位置以上に夫が登ろうとする大なる障害物である。

14

何となれば夫は妻に贅澤な生活と社會的の名譽を最も貴ぶように敎へて置きながら、併し、彼自身がそれを危くする。妻を持つ人は誰でも世間の口を恐れてゐる。交際社會は婦人の全生涯を社會的風評の爲めに犧牲にする。であるから、最つも不幸なことは夫が社會上特別の位置を持つてゐない時である。さう云ふ時に妻は最高なる交際社會に這入り得ることをのみ常に思ふやうになる。もし、唯、夫が習慣的期待に從ふことに一致しさへするならば。

15

夫と妻との間のかくの如き目的の對立は理想的結婚生活の妨げとなる。異なつた者同志はお互ひに引き付けられるものである。又、目的の同じであると云ふ事が愛情を持續させる。けれども、最高なる義務に就て爭ひのある處には本當の結婚生活はない。時とすると妻の心を無視する事に依て爭ひがなくなる事もある。又、意見の相違はなくとも趣味の相違がある事がある。若し高尙に育てられたな

らば夫と妻とが相互の趣味を讓り合ふ事があらう。併しこゝ云ふ妥協は結婚の理想ではない。

16

如何なる善き事情の下にも感情の差はあり得る。併し現今は女子教育の方法に依て殊にその差が誇張されてゐる。若し女と男とが兩立する事の出來ない標準に從つて教へられたならば、利益と趣味は絕えず同化されるであらう。そうなれば少くとも人生の大問題に於て、友情と云ふしつかりした基礎となる處の一致を見出す事ができる。

17

性質の違ひはそれが善であれば有益であるかも知れぬ、けれども一方が著しく劣つてゐる事は他の一方を惡化する。男と女の聯合は文明が進むにつれて增加する。故に、若し婦人の教育が劣つたまゝであるならば、男のためにも智力上大いに有害である。

18

結婚の理想は、お互に敬ひ合ひ、導き合ひ、從ひ合ふ處の二人の一致である。この關係を妨げるものは元始時代の野蠻主義の遺物である。

19

兩性の差別を撤廢することによつて得られる、心理的勢力の增加と、男と女の一般結合に於ける改良と云ふことに付いて今迄述べて來た。併し凡てに於ける利益の中で最も直接なる利益は自由にされた人類の半數の個人的の幸福であらう。衣食に次いで人間が第一に最も強く要求

するものは自由である。自由に對する慾望は道理が明らかになるに連れて減じるものでない。最も進歩した社會に於て個人の自由は最もよく擁護されてゐる。

20

我々は他人の自由の重要さに就て、餘りに考へないと云ふ傾きを持つてゐる。併し、各人は自己の權利を失つた事をあらゆる苦痛の中の最大なるものとする。それは國家關係に於ても同樣である。自由があるために男子及び國家が持つてゐた心理的及び道德的の勇氣と彈力を女子も亦自由を得た時に持つであらう。男子は自分等が先輩者の保護から解放された時に自分等が感じたものを思ひ起すがよろしい。女子も亦男子から解放されることによつて、それと同じような幸福を味ふであらう。婦人が自由を拒絕されるならば、活氣ある婦人達は自由の代りに外の力を求むる方行に向つて行くだらう そして、婦人の熱情は身體の美とか衣類とか虛飾の方面へ行く。斯ふ云ふ婦人の慾望は婦人に自由を與へる事に依てのみ防ぐ事ができる。

21

我々は又、家族に對する義務の爲に自身の活動力の出路を有たない婦人に就て考へなければならない。若しより大なる社會上の利益と職業が彼女等に開かれてあるならば彼女等はどんなに幸福であらう。殊に婦人が家族を持つてゐても、猶餘まつた活動力を持ちながら其活動力を利用せずに居る事はつらひ事である。唯彼女等に與へられてある仕事は宗敎と慈

善である。併し乍ら彼女等の宗教は説教をするのではないからして、それは事績にはならない、と同時に慈善に對しては彼女等の多くはそれに適して居らず又準備もない。國家の事務に於て女の行政上の力を見出すべきであると云ふやうなことが暗にほのめかされると、ぽんち畫家は直ちに十代の娘達が議會に坐つて居る樣子や、或ひは若き妻達が衆議院にくり込むやうな樣を畫く。彼等は男も又さう云ふ風に彼等の若年時代には政事にたづさわることを許されて居らない事に氣がつかない。若し婦人が行政事務に干渉（たづさは）るとすれば、それは年齢の熟した相應に資格ある婦人が干渉（たづさは）るのである。斯樣なる婦人には異性の仕事を非難し得る權利が法律上與へられるのである。人は浪費された婦人の感情から生じる不幸に付て心付いてゐない。この害は行政上の作用と有利なる職業を婦人に許さぬ間は尚增加するであらう。

22

こう考へて來ると我々は次のように感じる。人類が主に學ばねばならぬことは、相互ひに嫉妬深くそして偏した事を云ひ合つて既に自然が我々に與へて居る苦しみを、尚以上に殖やさない事である。

ミル著『婦人の服從』はこれで完結で御座います。こうして梗概だけを書いてみるとしつくりミルの云はうとする意味が讀者の頭へ這入らなくはないかと云ふ懸念も御座います。折りがあつたら全文を讀まれることを希望致します。もう一つ御斷りして置かなければならない事はミルの意見には批評を加へなければならない點が澤山あります。併し、ミルの時と今とは時代が違ひます。そして、今とは違つて全然婦人が眠つてゐる時の、即ち、第一期の婦人論の權威あるものとして私はこれを御紹介したわけで御座います。



時事評論

治警改正案に附て

新婦人協會が昨年の春以來、運動を續けて居た治安警察法改正法案は二月五日衆議院本會議に上され、いよ／＼委員附託と云ふことになつた、政友會及び憲政會からの提案は、女子の政談集會に會合し若しくはその發起人たるを禁ずる條項を削除しやうとするものであり、又、無所屬からの提案は前述の條項を削除する上に女子の政治結社加入の禁をも解かうとするのであつた。けれども、委員會にて川村警保局長が政友會と憲政會の案に賛成の旨を明言したと云ふのであるから女子の政治結社加入は許されないけれども、併し、女子が政談集會に會合すること、及び發起人たり得るやうになることは確實になつたわけである。

女子の故に政議集會に會合してはならぬと云ふことは餘りに馬鹿々々しいことで、今、その禁が解かれたからと云つて、それが當然すぎる程當然であるから、私としてはそれに對して嬉しいと云ふやうな感じは露程もない。

一體、法律と云ふものは、國民の全體の感情が蒸發してもう／＼と舞い上り、上空の冷靜な空氣に觸れて輿論と云ふ雨となり、その輿論に潤されて出來上るものであつて始めて有効な法律である。

で、この度の治安警察法の改正も、我が日本婦人の感情がもう／＼と立ちのぼつて、それが識者の冷靜な頭に觸れて、そして、その識者達の努力に潤ほされていよ／＼成功したものであらうと私は信ずる。

何れにしろ、これは我が日本婦人の自由の第一歩である。これを本當に確實に婦人子供並びに國民全體の爲めに有益に利用するやうに心掛けて、斷じて輕擧妄

動の具に供して男子のもの笑ひを買はないやうにしたいものである。

内閣更迭と國民性

名は依然と古いものでも内容ががらり變つてゐると云ふのが生きた世界である。云ひかへれば、名の意味はいつの間にか自然に變つてしまうものである。義理と云ふ言葉などは其のうちでも意味が全く變つたものゝ標本であらう。輿論と云ふ言葉などは、公衆の意見から始まつたものであるが、今はむしろ、二三人の私見が輿論となつてゐる場合が多くある。であるから、革命と云つても昔と今とは内容が違つてゐるのである。

もつと此れを正確に云ふと人間の生活を規定する制度さ云ふものは變化するものでもなし、又、變化しやう答もないのだが、併し、變化する可能性があり、又、變化しなければならぬものは人間と制度との間の關係である。で、此の關係を變へるには内容、則ち、定義を變へることが最善の方法である。猶、云ひかへれば、制度其のものではなく、内容を變へることによつて最善の効果が擧がるのである。

處が、今日の人間の頭は非常に怠け者になつてゐて、考へることは苦しいことであるやうに頭が無性になつてゐる。けれども、社會機關の發達、及び、物質生活の發達は考へなくても生活出來るやうになつてゐる。併し、考へずにゐるさ物質生活には不都合がなくても精神生活の方が、全く、停滯してしまう。處で、人間が最も深く必要とするものは精神上の滿足を得ることであるのに、ものを考察する習慣をもたない結果は其の滿足を得ることが出來ず、そして、それが苦い不滿となつて現れて來る。其處に社會の變調が始まるのである。

そして、考へないことが慢性になつて考へる力が痲痺してゐるから、何でも破壞的なことか、さもなければ、黄金世界が目の前に現れないことには人は感じない。そして、何でも目先きの變ることによつて滿足を得ようとする。

内閣の更迭を希望する聲も或ひはこう云ふ處から出て來るのではないかを私は恐れる。

基督教團體、殊に、新教團體は男も女も皆平等で、そして、其の團體は殆んごデモクラシーによつて治め

られてゐる。女も男も同じ勢力をもつてゐる。處が、其の中にやつぱり高いのと低いのが自然に出來上る。傳道師が特種の着物を着たり、いつの間にか階級や特權が出來上る。基督教徒は全然平等主義で行くのだけれども、もと／＼人間であるから、誤まりがない筈だと思つてゐる理想でもやつぱり誤まりがあるのである。

どんな卑賤な家から出たものでも羅馬法王になることが出來る。そして、其の法王の一擧一動には間然する處がないとしても、矢張り、全體の信徒はいつの間にか言論の自由を奪はれてゐる。なぜなら、勝手なことを云へば破門と云ふことになる。そして、これが人間社會の縮圖である。こう云ふようにどんなに嚴密に公平な方法で人が集まつてもいつの間にか不公平に終つてしまう。けれども、これは人間計りが惡いとも、又、制度計りが惡いとも云ひ切ることは出來ない。つまり、人間と制度との間の關係が惡いのである。その關係を改善しないことには此の弊は何處迄もついてまわる。

內閣の更迭に付いても矢張り此の原則の範圍を脫してゐないと思ふ。で、私は內閣の更迭と云ふことよりも內閣の內容、及び、內閣と國民との關係を改革する方がより重用であると信ずるものである。

戀愛の力と拒婚同盟

拒婚同盟には其の精神に於て勿論私は賛成してゐるけれども、唯、其の教育的宣傳としての價値を認めるだけで、此れが直ちに効を奏するものとは思つてゐない。なぜなら、昔から戀は盲目だと云はれて來た。戀のためには親も兄弟姉妹も名譽も財産も時によると生命をも捨てゝ來た。親も名譽も財産も生命迄も捨てる程强い力を持つてゐる戀愛が拒婚同盟會の規約を守るために其の愛を犧牲に成し得るかどうかと云ふことは大きな疑問であるに相違ない。

其の力强い愛を捨てゝ迄も、將來のため種族のためを計り得る程意志の强固な婦人も今日に於ては幾人かあり得るには相違ない。けれども、其の位の自覺をもつた婦人ならば同盟の力を借りる迄もなく自分でキチンと仕末をつけることが出來る。

拒婚同盟は本人の立場から、又、種族の立場から有

害である結婚を拒絶しようとするのが目的であるけれども、何を云ふにも愛は感情であり、病毒の防止は理窟であり、殊に、病毒を傳播するものは無自覺な本能の力に支配される結果であるから其處に大きな困難が伴ふのは當然であらうと思ふ。

病毒の傳播を盛んならしむるものは俗惡な自由戀愛である。それは殆んど戀愛と云ふ名を付けることは出來ない程餘まりに一時的な情慾本位のものであるかも知れないが、とにかく、さう云ふ男女關係が最も多く病毒を傳播するのである。それから、又、結婚の相手の健康に就て全く無智な媒酌結婚も病毒を擴げる原因になつてゐるに相違ない。

で、今日迄、欧米の先進國に於ては惡質病者が子孫を殘さないやうに積極的に、又、消極的にいろ〱な方法を講じて無垢な青年男女を保護しようとしたのであるが、どうも法律の効果は思はしくないと云ふ報告が至る處にあるようである。其處で、惡質病者の結婚を法律によつて制限しやうとすることは全く望しくない、或ひは、不可能であると云ふ意見を發表する人も此の頃は大分あるやうである。

花柳病の恐しいことは今更私が此處で云ふ必要はない。恐しいにも拘らず、それに對する豫防法の不完全であることも周知の事實である。他の傳染病たとへばコレラとかチブスとか云ふ病氣に對しては公衆も戰慄し當局も烈しい豫防法を講じて居ながら花柳病の豫防法が緩慢であると云ふのが今日の狀態であるが實は花柳病の方が何百倍有害であるか知れない。なぜなら、外の傳染病は烈しいには相違ないが一時的のものであるに反して花柳病は何處迄も血の續く限りは其の病毒も續いて行くのであるから。

其の上に花柳病は生理的の生命を害するのみならず倫理的の生命を害することは生理的の害以上である。此の病氣の裏面には幾多の婦人が悲慘な狀態に投げ込まれてゐる。此の生理的、倫理的、社會的の病毒に對して其の豫防法が緩慢であると云ふことに付いては其處に一ツの理由がある。そして、それは花柳病が破廉恥病である處から自然秘密にされがちになる。從つて社會の目の表面に大きく現れないからである。

けれども、前にも云つた通り、戀愛のために生命

（五十四頁へ續く）

姉を憶ふ

原田琴子

×

その夕べ
君を送りの紅き灯は
野をこえて風にはためき
森かげに
遠く遠く消えにき
君を焼くしろきけむりは
夜をこめて立ちのぼり
とこやみの空に消えにき
さて
縫ひさして君がおきたる
君が夫（つま）の衣は
わが手もて縫ひつぎもすれ
喪はれたる君がこゝろは
また知らむすべもなや

×

野に若菜のもゆるころ
庭にさくらの匂ふころ
君を憶ひて
わりなしや
陽はいく千たびめぐるとも
かへるよしなき君ゆゑに
君がひとりの妹は
さびしかるべしよのかぎり

×

夢にみる君がすがた
夢にきく君が聲音
そはいつもおぼろなれど

もろともに生きてある思ひぞ
かぎりなくうれしかりけれ
めざめてはそれもさびしさりながら
うつゝなき夢をおもへば
なつかしき君をおもへば
そゞろにこゝろさきめきて
あやしくも
夜のこひしや

×

ふるさとの野を行けば
草の香の
そゞろにも涙ぐまし
いづこにか雲雀は唄ふ
野のはての森かげに
わが姉のみ墓あり
苔むして
さびしけれ
春の日の陽のひかり
いみじくもこゝに溢れて
われひとり
あるに堪へじ

×

ひとりゐて
指に染みたるオレンヂの
甘き匂ひに酔ふときは
おのづと君を想ひいづ
指に染みたるオレンヂの
甘き匂ひは消え行けど
君こひしさは忘られず
春の夜の
さびしさよ

オリーヴ・シユライネルの死

現代の三大先覺婦人のうちの一人オリーヴ、シユライネル女史は長い間沈默の生活を續けて居たやうであります。女史に依て兎に角婦人問題の中核を握られた私は、後には、女史の說をとやかく批評はしながらも常に恩師に對する感謝、尊敬、懷しさの氣持ちは少しも減つて居ないのでありました。そして、其後の英米に於ける婦人界の沸騰又は變遷に對して女史はどう云ふ考へをもつて居られるであらう。少しも女史の聲の聞えぬのは一度健康を害された事を聞いた事があるが矢張り病弱な日を送つて居られるのかしらなど丶私は時々女史の風貌を目の前に描いては思ひ耽つて居るのでありました。

すると圖らずも先日在紐育の友人の通信のうちにシユライネル女史の死が傳へられました。何かしら大きな重いもので胸板をドシリ打たれたやうに私は感じました。その友人の文中には「近頃紐育は非常に物騷で每日强盜や窃盜が十數件にも上り、それが新聞紙には大袈裟に取り扱はれて一面の大部分を埋めて居るが、新婦人運動の母として、虐げられたボーア人の擁護者として、又文學者として我等の常に尊敬の標的となつてゐるオリーブ、シユライネル夫人の死は一個の强盜事件よりも注意を喚起されてゐないやうだ。」と云つて新聞紙の隅の方に倫敦發電報としてシユライネル夫人の死が小さく報ぜられてあつたことを憤慨の語調で書いてありました。

私もその點に付いては此の友人と同感であります。現在に忙しいさは云ひながら世人が餘りに過去を忘れるのが早いことを痛歎します。或る一人の人が急に祭り上げられる、けれども、その人の花々しい生活が一寸止むと、すぐ、その人に付いての噂は火の消えたやうになくなる、その人は世間から忽ち葬られる、と云ふ狀態を私は常に痛感して居ります。

その友人の通信に依りますさシュライネル女史の死を報じた電報は昨年の十二月十三日倫敦發としてありますから女史は矢張り其日か又はその前日か位ひに永眠せられたことゝ想像します。けれども女史の死は突然の死であつたか、それとも永く病床に親しんで居られた結果であつたかそれも今は知る由がないのであります。

私は昨年女史の著『夢』を『若き愛と智の目醒』と題して出版致しまして、その中に女史の小傳と思想及び著作を紹介して置きましたから此處には略さうと思ひましたが、併し女史をもう一度偲ぶよすがとして、僅かしか知ることの出來ない女史の生立と思想の一端を此處に掲げて哀悼の辭に代へやうと思ひます。

シュライネル女史は英國人でありますが、生れた處は南亞米利加のバストランドと云ふ一寒村で、傳道館の中に呱々の聲をあげたのでありました。そして、それは一八六二年でありました。と云ふのは女史の父がルーテル派の傳道師でありましたので、傳道のため、英國から其處へ遣られてゐたのであります。母も矢張り英國人でありました。

南亞弗利加の一隅の野蠻人の中で生れた女史は、幼い時分から、常に、叢林の中をそゞろ歩いて遊んでゐました。そして、其の邊を飛び廻つたり、囀り交してゐる小鳥にいつも注意を引かれるのでした。其の小鳥達はお互ひに戀歌を謠ひながら、雌と雄とが力を合せて巣を造つたり、雛鳥を養つたり、又は、お互ひの上を保護し合つたりしてゐました。

小鳥の純な、美しい兩性生活を腦裡に深く刻み付けた小女時代の女史の口には人間の男女關係が餘りに汚なく、餘りに醜く映りました。『生きとし生けるものゝうちで最も高尚であるべき筈の人間がどうして、さう下等で、さう不公平で、さう罪惡の淵に沈んで居るのであらう?』と云ふのがまだ小女時代の女史の疑問でありました。そして、女史の環境、則ち、亞弗利加の野蠻人の赤裸々な生活は、女史に兩性關係研究の好材料を供給したのでありました。そして、女史の研究は進みました。そして、女史は野蠻な亞弗利加の一隅に身を置きながら、現代の各文明國の婦人の位置を說き、且つ、婦人の進み行くべき道を世界に提示したのでありました。

女史の處女作は、一八八三年、女史が二十歲の頃書いた、「アフリカ農園物語」(The Story of African Farm)と云ふ小說でありました。女史は此の作が出來上がつた時に、それを持つて亞弗利加を後に祖國なる英國へ出て來ました。そして、我が日本でもなじみの深い一代の小說家ジョージ、メンデスにその作の價値を認められまして、忽ち、それが出版される運びになりました。女史が小說家として名聲を博するやうになりましたのはこの小說に依てでありました。そして、これはラルフ、アイアンと云ふペンネームで出版されたものでありました。

この處女作は極端なカルビン派の教から、極端な無神論者になつた徑路を描いた、いはゞ女史の精神上の自傳であります。この作の主人公ワルドー(十歲を出た許りの少年)の口を通じて、女史は胸を嚙まれるやうな悲痛な文字で人格ある神の存在を疑はしめてゐます。エレン、ケー女史が矢張り十歲の時、神の存在を試して見たことがありますが、大人物の幼年時代の大膽な行爲が皆よく似てゐることを、私共は痛切に感じます。此の小說は三百四十餘頁餘りもあるものですが、その眼目とする處は、婦人が解放されるには、先づ、婦人を束縛してゐる男子の手が、その繩目を解いてやらなければ、婦人は身動きさへも出來ないと云ふのであります。

其の次に出版されたものが前に申上げました『夢』(Dream)でありますが、其の後引續いて公にしたものは

『夢の生活と現實の生活』"Dream Life and Real Life" (1893)

『騎兵のピーターハルケツト』"Trooper Peter Halket" (1897)

「南亞弗利加に對する英國人の意見」"An English South Africans View of Situation" (1899)

『性慾の節制』"Sexual Abstinence" (1907)

「婦人と勞働」"Women and Labour" (1911)

であります。之等の著述の中最後の『婦人と勞働』は現代婦人問題の聖書とも云はれるものでありまして、出版になつてから、一年間に十一版を重ねたものであります。けれども、世間での其の歡迎は、むしろ、當然でありませう。何故なら、これは先づ女史の一生涯

の心血の結晶でありますから。其の序文の一節に次のやうなことがあります。――「人類の歩みを司つて來た愛の神（キユーピツト）は人間の肉慾と貪婪のために泥まみれにされて疲れ果てゝしまつた。此の神樣の目は光りを失つて苦惱に充ち、美しかつた其の金髮は不正と暴虐の塵埃のために、餅のやうにかたまつて、羽箭は折れ、翼は曳きずられて汚れてしまつた。そのために、人はこの天使を見て、「愛は醜い、愛は惡魔である。」と云ふやうになつた。そして、人は根本的に善であり、美であるその愛を撲滅しやうと試みた。けれども、これは、唯、一時の現象でいつかは此の愛の神樣が友情と自由の流の中に長年の泥と埃を洗ひ落す時が來るであらう。そして、再び眞白な翼を擴げて、輝く未來の日光を浴びながら天に向つて飛揚するであらう。」

又、次のやうにも云つてゐます。

「現代の婦人がその生活を新たにすると云ふことは性慾を恣にするのもでなく、混亂の狀態を社會に現出することでもなく、又、放縱に耽ると云ふことでもない。婦人は性的關係の神聖を高調し、社會の基礎としての男女關係を明瞭に知覺し、そして、性的の關係に於ては男子の上に支配權を握らなければならない。男女關係の純にして美しく、そして、健全であることが、又、全體としての人類の純と美と健全を意味するものである。」と。

女史は生殖の作用を高尙なものとするのみならず、又、男女の結合の强い精神的の創造力を高調してゐます。ですから、シユライネル女史もエレン、ケイ女史と同じやうに完全な人間生活の基調を戀愛に置いてゐます。けれども、此處で違ふ處は、ケー女史は純粹なる戀愛を結婚の基礎として愛の濫用を防がうとし、シユライネル女史は婦人に經濟上の自由を與へて婦人の勞力を大にし戀愛に對する男子の暴力を抑へやうとしてゐます。で、シユライネル女史の『男子は職業を得るか餓死するかであり、女子は職業を得るか寄生虫になるかである。」と云ふ言葉は有名なものであります。

シユライネル女史は小女時代に既に兩性關係に付いて深く研究してゐたことは前にも申しました。從つて、女史の研究は先づ地球上に最初現れた生物の性的作用の差から始まりました。人間以外のあらゆる生物の性の進化を研究し、續いて最も原人的狀態にある婦人、

野蠻狀態にある婦人、及び、半野蠻狀態にある婦人を觀察し、研究しました。こゝ迄の研究が完成したのは一八八八年、女史が二十六歳の時でありました。其後一八九四年クロンライト氏と結婚しましたが、尚研究を進めて女史は所謂婦人問題に這入つて行つたのです。そして現今の歐州に婦人問題が起つた原因、其の進みつゝある方向及び其結果に付いて論じました。そして、それがまとまつたのが一八九九年女史が三十七歳の時であつたのです。

長年月の間の女史の研究は時には小說となり、時には夢物語りとなつて、折々出版されたのでありますが、それ等を全部まとめて一大論文としたものが、前記の『婦人と勞働』であります。

で我が國には第一にこの『婦人と勞働』が紹介されまして、そして、それが勢力を贏ち得たものですから、シユライネル女史と云へば人は、唯婦人論客としてのみ見て居るやうでありますが、併し、女史は論客としてよりも、文學者としての價値を多分に有つた人であります。亞米利加からの近著の雜誌『Nation』に此の點に付いて批評がありましたから次に御紹介いたします。

オリーヴ、シユライネルの文學的生活は大抵の殖民地の文學と云ふ範圍を出なかつたが、併し、それには確かに天才の閃きと藝術の未來があつた。けれども後には思想界の論戰と社會奉仕の方面に切り込んで行つた結果、女史の藝術味は宣傳の方にすつかり吸ひ取られてしまつた。勿論女史の思想上の主張は貴ひには違ひなかつた。女史が南亞戰爭中ボーア人を保護した如きは日頃の女史の貴い主張の一端であつた。その當時に於ては今の英首相ロイド、ジヨーヂ氏も亦ボーア人の保護者であつた。

シユライネルはテニソンのプリンセスやディツクンのドーラやサツケリーのアメリヤの如き今日に於ては古典になつてゐる文學に保護されてゐる一種の型の婦人を葬むることに貢獻してゐる。そして、凡ての婦人論者中の優なるものゝ一人になつたのである。『婦人と勞働』は一記錄としては女史の書いた『南アフリカに對する英國人の見解』よりは生きのびるものであらう。併しながら、シユライネルの死を聞いて直ちに私共の心に浮んで來るものは『婦人と勞働』ではなくて矢張り

「アフリカ農園物語」である。思ふに一番長く女史を記憶させるものは矢張りこの小説であらう。

斯様な小説が十代の娘に依て書かれたと云ふことが確かに偉大である。ジョージ、メンデスがこの小説の原稿を見て一八八三年に出版さるゝ前、修正を忠告した事實は少しもこの小説の價値を少なくしてはゐない。この小説がいよ〳〵出版された時は女史はやうやく二十一歳であつた。女史の若いさ云ふことが、つまり、人生に經驗が淺かつたと云ふことがこの小説の缺點であつたとしても、併し女史の若かつたことが又この小説の生命であつた。この小説中のローマンティックな要素は確かに女史が人生のより大なる經驗を缺いてゐて、そして、その當時の文學上の因習に依りかゝつて居た事を思はさしむる。

殊に小説中の女主人公リンドールと不可思議な旅人との戀のいきさつに於て殊にさうだ。こゝそこに現はれてゐる誇張した文體は確かに未熟の混雜した情緒を現してゐる。けれども、大體に於て、著者の若いこさがこの作の筋を面白くこそ運んではゐるが、併し妨げにはなつてゐない。

觀察の生々してゐることと正直な娘の特長である對話の卒直などがこの作の特色である。又、女史の描いた景色はその當時は人の注意を引かなかつたが、今になつて始めて其の勝れてゐることが分つて來た。女史の描いたやうな景色がアフリカにあるのを今迄誰も氣が付かなかつたのである。又、その小説中の人物ワルドーの經歴を記した精神上の混亂を理解するためには青年の熱情と眞劍さが無ければ到底理解できない。又、リンドールが信じゐて、そして實行してゐたあの異端說をかく迄に強く書くことは社會秩序の不公平を痛切に感じて理解ある批評眼をもつてゐなければできないことだ。

批評家としてのシユライネルは「アフリカ農園物語」に於て色々な問題に觸れてはゐるが、矢張り、婦人の位置がその主なるものであつた。かくして婦人論者としての女史の經歴は既にもうこゝに現れてゐたのである。ピクトリア朝の文學に現れた女性に對してはシユライネルの小説中のリンドールは全々反逆者であつた。

ジョージ、エリオットは、必要な場合に半分は盲目的

に反逆する女性を描いた。ジョージ、メレデスは、物事を皆自分自身に引き受けて、そして、自分の世界を造り得る女性を描いた。トーマス、ハーデはヴクトリア朝の文士によつて、よいとされてゐたなよ／＼した女性の代りに、本能的に社會の法律を破ろうとして、却つて、その法律に從はされた、野生の女性を描いた。そして、シユライネルの描いたリンドールも又反逆者であつた、考へることの出來る反逆者であつた。

　リンドールはメリー、ウオールストンクラフト女史のやうに大膽に男と同じ敎育を女子が受けること、自分自身と財產とを女自身が管理する權利を要求しむのである。一言で云へば、シユライネルはその聰明な頭腦をもつて、一八九〇年以前には誰れも現し得なかつた女性、現代的の若い女性を描き出したのである。

（四十五頁より續く）

も財產も名譽も犧牲にされるのであるから、法律の制裁や、同盟の規約がどの位の力があるものか、むしろ、無力であるかも知れないのだからして、法律の制裁や同盟の規約を有効ならしめようとするならば、それに有力な背景を先づ造る必要がある。そして、それは與論的國民の信仰である。

　コペルニカスを殺し、ソクラテスに毒盃を與へ、基督を磔にしたものは理論ではなくて國民的信仰であつたことを私達は忘れてはならない。其處で、拒婚同盟の成功には、有害な結婚は個人並びに社會に對する最大强敵の一つであると云ふ國民的信仰がなければならない。この信仰を造ることが急務である。そして、此の國民的信仰を造るものは誰であらうか？

平等は民主々義的社會に於てゝすら終局の目的ではない。平等には常に多少の嘘がある。自然と遺傳が平等に反對してゐる。平等と云ふものは進步的社會になくてならない不平等を單に制裁し利用する社會的プログラムである。

教育社會學講話（第一回）

人間性

社會學者が人間性を研究するにはどうしても生理學者と心理學者の智識を借りなければなりません。實に生理學者と心理學者から智識を貰つて來ないことには社會學者はその仕事を始める事が出來ないのであります。併し乍ら、さうは云つても、今日の智識の程度では、生理學や心理學の智識を借りて來ても、未だ、矢張り、人間性の圖表を造つて、そして單純であると同時に眞理である言葉で明瞭に人間性を記述することは難しいのであります。なぜならば人間性が種々雜多であると云ふことが分類を難くして居ますし、又、人間性の複雜な事が最後の分解を許しませんから。で、ジヤストロー博士は『人間の心の化學を企てることは無益である。』とさへ云つて居ます。實

に人間性を論じてゐるといつの間にか科學の範圍を越えてその先きの神秘的な或ひは形而上學的な概念の中に釣り込まれて仕舞ふと云ふのが普通であります。

で、經驗の淺い思想家達は之等の神秘的な形而上學的な概念をいつも高い處に祭り上げて居ります。思慮の淺い社會改革家が役にも立たない、素晴しい大きな理想をいつも掲げて居ると同じように。又可なり經驗ある思想家でも科學的の議論を爲やうとして居ながら、いつの間にか哲學上の概念の中に滑り込んで居ります。

誰れでも自己觀察及び自分自身の經驗から取つて來た人間性の內觀をもつて居ります。そして、それを科學の結論とは無關係に、又、時としては科學の結論を全く無視して獨斷的な解釋をして居ります。人間性に對する科學的の態度をとることは容易でないに相違ありません。又、或る人にとつてはその科學的態度が全く不可能であります。

ですから、私共は人間性を知らうとしても或る範圍を定めて一定の制限を先づ置く事が賢い行き方でありませう。そしてさうする事に付いて最も重要なものは凡ての形而上學の問題を遮斷する事であります。私共は今こゝで人生の終極の性質を知らうとするのでもなく、或ひはそれを研究しようとするのでもありません。例へば、肉體對精神の關係や、自由意思對命數論の問題や、又は、最高な善とは何ぞやと云ふ事や、人生の裏面に意識があるかどうかと云ふやうな問題などを今こゝで知らうとするのではありません。それ等の問題は哲學乃至宗教に屬するものでありますから。科學は少なくとも、今日に於ては、それ等の問題に答へる事は出來ないのであります。或る學者はそれをはつきりと斷言して居ります。

ハーバート・スペンサー程獻身的に科學の全部を研究した人は少ないのでありますが、それでも、スペンサーは彼の綜合哲學の第一部を『不可思議』と命名して居ります。

其處で社會學は生理學及び心理學のやうに人間を自然界の一部と見て、そして、我

々人間がこの世界に於て見たり經驗したりするもの丶裏面には一定の統一があることを信じ、そして、適當な研究の方法に依つてその統一法を發見しやうとするものであります。勿論、社會學は我々人間が何んでもを知ることが出來るとは云ひません。科學が發見し得るもの丶裏面に他の要素がないとも云ひません。又、科學が斷言し得る天命以外に他の天命があるとも云ひません。で、ウォードは『自然界に於ける一切のものは、もし、我々があまり遙かに溯つて行くならば説明が出來なくなる』と云つて居ます。

又、クーレーは、社會を計り知る事の出來ない森林に擬へ、その森林の中を夜間提灯をつけて行く人の一體を學者に擬らへて居ります。學者の提灯があたりを照し、全體としての社會を照し、そして、人々の足許を明くして、人々が取るべき方向を敎へるものであり、時とするとその提灯の光りは無限に擴がつて行つて、そして、だん／＼明るくする面積を大きくして行きますが、併し、矢張り、その先きの方には常に薄暗い處が無限に殘つて居ると云ふのであります。

生命は活動

人間の經驗と社會の諸現象とは、科學が解釋し得る範圍内に於ては、自然界の人間以下の現象と同じように、精力(エナヂー)の變形に過ぎないのであります。人間であれ、動物であれ又は植物であれ、生命は決して靜的のものではなく、生命は活動なのであります。生理學者から見れば生命は結局間斷なき科學的變化であります。則ち同化作用(アナボリズム)と破壞作用(キヤタボリズム)との二ツの補充的形式となつて細胞の中に行はれてゐる代謝機能(メタボリズム)が生命なのであります。

それから、心理學者が研究する生命の形は腦の細胞中の破壞作用に伴ふ意識の流れであります。そして、その腦の細胞中の破壞作用と、それに伴ふ意識は環境の刺戟がない時にはその活動的潮(うしほ)が非常に低いのでありますが、もし、環境が鋭い刺戟を與へるならばその潮が活潑になるのであります。

其處で社會學者が研究する活動の種類は、人間が環境から受ける刺戟に對して反應

しようとするその活動であります。ですから社會學の全體の理論は刺戟とその刺戟に答へる代謝機能の基礎の上に造られ得るのであります。或る程度迄は、又、其上に造らなければならないのであります。

例へば習慣や暗示性や或ひは模倣性の如きがその刺戟であります。それ等の刺戟は鋭いものではありませんが併し常に存在してゐるものでありますから、もし、それに對抗する他の刺戟がない時にはそれ等の三ッの刺戟が人間の行爲を決定してしまいます。ですから、それ等は社會上重要な力であります。外からの何等の壓迫がない時にはこの三ッの刺戟に依て人はその考へと行動を定め、かくして社會組織の原則となる土臺が据へられるのであります。

さう云ふやうに人の行動は、普通、環境からの刺戟に依て定まるものでありますけれども、又、内部から起る衝動と云ふものもあります。これは習慣的の活動の時が來る時に、例へば暫く休んだ後などには、たとへ、何等の刺戟が環境から來なくとも、落ち付いては居られなくなります。そして、これは子供が最もよく現して居ります。

子供は內部から起る衝動の爲めにじつとしては居られないで戶外へ出て行きます。そして、大抵は自分に必要な刺戟を外で見出します。この同じ原則が各時代の國民のうちにもありました。つまり、始終何かしら爲ずには居られないと云ふ性質を人間は有つて居るのであります。

貧乏人にとつてはその爲なければならない事と云ふのは第一に衣食の爲めに働くことであります。そして、富者も又同じやうに働きます。働くと云ふことは同じでも併し、富者には仕事を撰擇すると云ふ自由があります。富者の方は利潤を得る爲めに働きますが、それも、單にその金を費したいからと云ふ計りでなく、自分の持つてゐる精力(エナヂー)を使はなければならないからであります。同じやうな理由で富者の妻は着飾ることや家の中を飾ることや、御馳走することや、訪問するために働きます。それは貧乏人の妻が貧乏の爲めに働いて精力を費すのと同じことであります。攻進的な性質の人は始終衝突を探して居ります。例へば政治上の爭ひとか、產業上の競爭とか、戰爭とか、又は社會的の張り合ひとか、又は隣人との爭ひとか云ふようなことを。

或る學者の說によると、あの十字軍を惹き起した一ッの原因は村落の單調な生活に我慢の出來ない靑年の冐限的な慾望からだと云ふ事であります。そして、又、平和な靜かな生活を好む村人等がそれ等の騷々しい靑年達の出て行くことを奬勵した理由も澤山あつた事でありませう。

差し當り何にも爭ひがない時には爭ひを好む人間のその性質は人爲的な爭ひ、則ち競戯や遊獵の形ちになつて現れて來ます。フートボール、ベースボール、討論會、又は、演說會のやうなものも其種類であります。母や敎師は凡てこれ等の例が子供にぴつたりあてはまることを知つて居ます。敎師にならうとする人はこの點に多大の注意を拂ふことが必要であります。

或る大學で學生達が彼等の室內に居るべき筈の時間を外出してゐると云ふ傾向が著しくなつた時、室內に計り居なければならない課業を持つてゐる彼等が外に興味を引かれるのは自然であると云ふことになりました。そこで、大學の當事者が俱樂部を組織し、そして、大學の敎授が一部、生徒が一部を以てそれを經營すると云ふことにな

つて、それから後と云ふものはすつぽかしが減つたと云ふ事であります。で、この點に付いてウォードは申ます『慾望は一切の有機體を貫いて世界を動かして居る原則である。凡ての行爲のバネ、自然界の脈(みやく)である。世界の生命である。實に慾望は有機體的力である。そして、慾望の無數の形式は自然界の無數の力と同じく一つの宇宙の力の色々に分れて現れてゐる表現である……で、罪惡と云ふものは決して直接には利用できないと云ふ事を罪人に知ちせ罪人の心を廣くする事に依てのみ罪惡は妨止され得る。』と。

又、スモール教授は次のように云つて居ます。

『人間は興味と云ふ材料から出來て居る。猶これを正確に云ふならば人間の行爲を煎じ詰めて見ると興味と云ふことになつてしまう。……して見ると人間の興味が社會現象を計算する單位である。であるから、人生と云ふ過程は、我々の知り得る範圍内に於ては、これを個人の見地から見やうと又は社會の見地から見やうと、興味を發達させ調節し滿足させる方法に過ぎない』と。

編輯を終りて

庭の隅々にはまだ雪が殘つてゐて餘寒がきびしう御座いますが晴れた日には何處か目に見へぬ處に春の氣が萠して雪にとぢこめられて蹂んでゐた一切のものがゆるんで育つて行くのが感じられます。昨年の今頃かすかな聲を舉げて生れた本誌も炎暑を通りぬけ嚴寒を越へて滿一ヶ年の歩みを續けて參りました。私にとつては何とはなしに胸の踊るのを覺へまして、『女』を讀了するとすぐ本號の原稿にとりかゝりました。本誌の印刷がすみ次第『女』の印刷が始まる手筈になつて居ります。微力ですけれども世間の浮ついた浪に決して動かされない本誌のために相變らずの御援助御鞭韃の程を御願ひ申上げます。

『女』は三月の中旬には書店に現れる豫定で御座いますが私はこれを讀了して本當にこれが時代精神の結晶これが代表的の新しい女だと云ふ感を深くしてゐます。『女』は個人の尊貴を叫び現存の結婚制度を非難致しまして『結婚はたましひの質入れ肉體の豫約だ』と豪語して戀愛の自由を主張してゐます。戀愛の自由と云ふことに關しては此の『女』と私とは意見が違ひますが併しこの『女』のが現代の最も進歩したと自稱する婦人の代表的思想であります。けれども親と子の間に懸隔があればある程進歩の道に叶つたものだと云ふあたりは流石に聰明な頭腦であります。前號で御紹介したBarbusseが云ふ通り此れは既成の文學のどの階級にも屬しません。小說であり詩であり議論であり感想であります。そしてこれが一個の人間の生活を表現する生きた仕方であると私は考へて居ります。

寄贈書目

愛國婦人	二月號
婦人くらぶ	同
婦人界	同
婦人畫報	同
婦女新聞	同
雄辯	同
實生活	同
文化運動	同
國粋◎國本	同
住宅研究	同
新組織	同
月刊樂譜	同
潮聲	同
精神統一	同
女性同盟	同
女性日本人	同
婦人公論	同
越後タイムス	毎週
化貧樂	二月號

婦人と新社會

自一號至十號
四六版六百五十頁

合本

總クロース
金字入美本

定價貳圓五十錢

婦人と新社會は外の雑誌と違つて殆んど一人の手になるものであり従つて議論が一貫して居りますため揃へて持つて居たいと云ふ希望者が大分ありました、それで今度合本致しました。御希望のお方には實費貳圓五十錢で御分け致します。御希望の方は至急婦人と新社會社へ御申込み下さい。

本誌定價表

一册	金二十五錢	送料五厘
六册	前金 金壹圓四十錢	（送料共）
十二册	前金 金貳圓七十錢	（送料共）

■誌代及郵税は前金の事
■郵券代用は五厘切手にて一割増
■廣告は御照會次第御相談いたします

大正十年二月二十三日印刷納本
大正十年三月一日發行

東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京神田區仲猿樂町十七
印刷人　大杉直次郎

東京四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會
振替東京五三六八八